

選鉱の変遷

上田健次

上北鉱山の選鉱は、昭和 17 年にシッガー及びテーブルによる比重選鉱場の建設に始まり、その後昭和 28 年 3 月に硫化鉄鉱 7,000 トン/月処理の比重選鉱場を、また 11 月に銅鉱 5,000 トン/月処理の浮遊選鉱場をそれぞれ建設し、12,000 トン/月処理の木造傾斜選鉱場が完成した。さらに、昭和 33 年には含銅硫化鉄 11,000 トン/月、硫化鉄 9,000 トン/月、合計 20,000 トン/月の処理を開始した。

しかしながら、その後は鋭意探鉱に努めたが新鉱床を発見できず生産の縮小に至り、昭和 46 年 9 月に坑内採掘作業を中止、昭和 48 年 6 月 露天採掘作業を中止した。

上北鉱山は、もともと奥乃沢鉱床の高品位の直送銅鉱によって始められており、その後本坑や立石坑の坑内掘りの鉱石処理が始まったが、鉱質上分離が難しい鉱石があった。

生產品は、山元から 21 キロメートル離れた野内まで索道で運ばれ、銅精鉱は日立製錬所へ、亜鉛精鉱は三日市製錬所へ、硫化精鉱は当初は社外へ販売されていたが、その後関係会社である苫小牧ケミカルへ運ばれるようになった。

坑内外の採掘休止に伴い、日本鉱業は東北鉱山保安監督部の指導、連携のもと坑廃水処理に人員を常駐させてきたが、平成 13 年 4 月に公益財団法人「資源環境センター」に移管されるとともに、中和処理設備、坑廃水自動化装置、pH 監視装置並びに在宅監視システム等が逐次整備されてきてお

り、今日では坑廃水処理に万全を期していると聞いている。